



2004・秋号
発行：法問寺
題字：鈴木裕子

秋のお彼岸

お彼岸は、正式には「彼岸会（ひがねえ）」といい、春と秋にそれぞれ春分の日と秋分の日を中日として前後三日間の計七日間にわたって行なわれます。日本独特の仏教行事で、聖徳太子の頃にはじまったとも伝えられ、江戸時代には年中行事として定着しました。



「彼岸」とは古代インドの言葉、 Sanskrit 語（梵語）の「パーラミタ」（波羅蜜多）を訳した「到彼岸（とうひがん）」からきています。「迷いの世界」であるこの世「此岸」から、「まよりの世界」である「彼岸」に至る、という意味です。つまり、彼岸会とは、本来、さとりを開くために、仏道に精進する行事なのです。したがってお彼岸には、先祖をしのび、自分の今あることを先祖に感謝して、供養の法要や墓参りをするのも、「自らも彼岸に渡る」ことができるようになる

するものとされています。例えば生き物をいづくしみ、心おだやかにして、施しを行なつとか、念仏を唱えるなど、信仰の実践をすることがすすめられています。



彼岸餅

お彼岸の供え物には、おはぎ、ぼたもちがつきものだが、この二つはどう違うのか。ぶし館かこし館かの違いだとか、もち米とこはんを混ぜる割合の違いだとか、地方による呼び方の違いだとか、いろいろな説がある。実際は同じものでばた餅はもと「牡丹もち」、おはぎは「萩のもち」であつたといわれる。今では一年中売られていることもあつて、混同して用いられるようになったが、本来、牡丹の季節・春のお彼岸に供えるのはぼたもちで、萩の季節秋のお彼岸に供えるのがおはぎというわけ。昔は砂糖も米もたいへん貴重なもので先祖に供えて供養するともに、多くの人に分け与えることは、功德を積むことだったのである。



今年の夏

今年の夏は記録的な暑さが続く毎日でした。ほんとに暑かった。七月のお盆では恒例の「みたまお迎え法要」に多くの檀家さんが参加され、幻想

的なロウソクの明かりに先亡のみたまをお迎えすることができました。七月十三日のお迎えの日には新潟県地方に豪雨災害が起き悲惨な災害現場がテレビ、新聞等で報道されました。お盆が終わる頃から



葛飾区内の浄土宗寺院の数か寺では、お



施餓鬼法要が始まりますがその合間をぬっての七月二十二日に、一日だけでしたが新潟県三条市の豪雨災害被災者宅に伺い家財

道具の運び出しや清掃のボランティア活動に行つて来ました。一人住ま



いのお年寄りのお婆さんのお手伝いをさせていただきました。丁度、夏休みになり被災地近辺の若い方々がボランティアとして参加して、一緒に汗まみれになって一日が終りました。「今時の若い奴らもけっこつやるじゃん」という感想でした。

法問寺花だより 鈴木裕子

小さい白い花は「たますだれ」。夏の終わりころから咲き始める可憐な花です。本堂脇に咲いたものです。



そして、毎年、咲く時期が微妙な彼岸花・・・少しずつ増やして来ました。檀家さんに頂いた白（クリム）の花も大分、増えてきました。ただ、中日あたりに間に合わず、みなさんに見えていただけない彼岸も



多々ありました。早めに咲いてくれれば、見ていただけるのですが・・・今年はどうでしょう・・・？

◆ 編集後記 住職

昔、子供の頃、お彼岸になると何軒かのお檀家の方が手作りの「ぼたもち・おはぎ・五目寿し」などを重箱につめてご本尊さまへとお持ちになりました。その後はおさがりのご馳走となるわけですが、誰々さんこのは、美味しいねとか、誰々さんこの「おはぎ」はいい甘さだねとか言っ頂いた思い出があります。手作りの各家庭の味が懐かしく思えます。